

スの創造論—ボナヴェントゥラの創造論に対するトマスの批判』『中世思想研究』XXI, 1979, *Un Dieu transcendant, Créateur et Exemple, selon Saint Bonaventure: Un essentialisme cohérent*, 1988, 「トマスにおける実在と言葉—日常言語の分析から *esse* の意味へ」『中世思想研究』XXXII, 1990. 参照), この点の議論がない, 或いは課題としての指摘がないのは残念に思われる. この点がクリアされないならば, 両陣営の議論はいつまでも平行線を辿るであろう.

---

平石善司著『フィロン研究』

創文社, 1991年, vii+429頁

水 垣 渉

本書の中核をなしているのは, 著者が1961年, 広島大学から文学博士号を授与された学位論文である. その主論文が第一部「フィロンのロゴス論」であり, 副論文が第二部「フィロンと初期キリスト教思想」であった. 著者が50年代の後半に精力的に行った研究の成果が一書にまとめられてようやく一般の学界に提供されることになったことを率直に喜びたい.

以上のような本書の成立事情からして, この書評には, 60年頃と現在という, フィロン研究史における二つの段階・水準のそれぞれに照らして批評するという二重の課題が与えられることになる.

まず現在の研究状況についていえば, 新しいテキストと翻訳, 古代語訳の研究と評価において30年前に比べて相当の進歩が認められる. また隣接領域における研究の関心の変化に対応して聖書解釈法, 中期プラトン主義などのギリシア思想との関係, ヘレニズムとの関係におけるユダヤ教の位置づけなどの諸点において, フィロン研究は新しい段階に入っているといえる. 研究テーマの特殊細分化も著しい. しかしこのような現段階の研究状況の中に本書を置いても, 本書の価値はいささかも減じない. その理由は, 本書がテキストそのものに基礎をおく根本的研究であり, 今日においても新鮮な——そしてその後の研究の進展によって確証され, かつ今後の研究

に光を投ずるような——問題提起と解釈の試みをなしているところにある。ことにロゴス論ということからいえば、今日でも本書のような徹底的でかつ全体的な解釈は、他に少ないのではないかと思われる。

60年頃のフィロン研究は、1947年に出版された H. A. Wolfson, *Philo. Foundations of religious philosophy in Judaism, Christianity, and Islam* (Second printing, revised 1948) の巨大な業績によって多かれ少なかれ規定されていたといっても過言ではない。ウルフソンは本書の副題が示すように、三つの宗教と密接な関係をもちつつ展開されていく西洋中世（さらに近世）思想の基本的パラダイムをフィロンが据えたことを強調しようとして、哲学、倫理、政治に関する諸テーマを網羅的に検討している。「ほとんど17世紀間にわたってこのフィロンの哲学はヨーロッパ思想を支配した」(*ibid.* II p.459 (fifth printing, 1982 による)) というのである。著者も「フィロンの偉大な学的功績は、上述のような人類の精神史におけるもっとも根源的な問題 [= 啓示と理性、神と世界との限界領域の問題] を、少なくとも最初に自覚的に取り上げた点にあったのではなからうか」(12ページ) と述べて、第二部ではパウロ、アレクサンドリアのクレメンス、トマス・アクィナス、またアリストテレスらとの関連でこのことを明らかにしようとしている。ウルフソンと似通う問題意識が著者にはある。

しかし著者は、ウルフソンとは異なる立場と方法から出発する。ウルフソンが「ギリシア哲学をそれとは全く異なった起源をもつ信仰と伝統との型にしたがって作りかえよう」(*op. cit.* I p.4) としたフィロンの思想内容を逐一解明していくのにたいして、著者は「つねにモーセの思想の優位性を認め」つつ「伝統的なヘブライ思想の立場から、当時アレクサンドリア文化の背景であったギリシア思想と対決し、かつそれとの調和をいかにはかるか」(8ページ) に腐心したフィロンの「思惟の根本的モチーフ」乃至「思想内容を統一する内的原理」(7ページ) を把握しようとする。この《*Motivforschung*》が著者の方法である。

モチーフは単なる一個の思想ではなく、「哲学的生の深き内的自覚」(23ページ) にかかわる。そこで著者はフィロンにおける神探求の主体的出発点となった人間存在の無 (*ἡ ἀνθρωπίνη οὐδένεια*) の自覚が、彼自身の「深刻な霊肉の戦いを通して到達」されたものであり、しかもこれを彼は「神の啓示として神の側から与えられたもの」と受けとった、と指摘する (60-63ページ)。ここには、「自己絶望」と「神の知識」との「弁証法的二重構造」(65ページ) が存在している。フィロン自身の体験のうち

に、「異質の原理が、直接的に連続することなく、それぞれ絶対的断絶性を保ちながら、しかも相互に関係」(14ページ)する、という事態が現われているのである。フィロンにおける神と世界、啓示と理性、さらにはヘブライズムとヘレニズムといった問題にも同じ構造が見出される。著者はこのようないわば「非連続の連続」(73,78ページ参照)の事態を「象徴的相関関係」の概念で説明しようとする。これが著者の解釈学の根本概念である。そしてフィロンが象徴的相関関係を本質とする彼独自のロゴス論をもって、直面した諸問題の解決を試みたところに彼の思想的特色と思想史的意義が存する、というのが著者の根本的主張であり、このことは「序論—課題と方法—」,第一章「フィロン哲学の中心問題としてのロゴス論」ですでに結論的に表明されている。

本論の第二章から第六章において、著者のテーゼを裏付ける、個々のテーマについての綿密なテキスト解釈が展開される。各章の表題をあげておく。第二章「フィロンにおける『ロゴス』の用語法」、第三章「フィロンにおける『ロゴス』の意義—『ロゴスの二重性(象徴的相関性)』—」、第四章「神と『ロゴス』—『範型』としての『神のロゴス』—」、第五章「世界と『ロゴス』—『世界法則』としての『神のロゴス』—」、第六章「人間と『ロゴス』—『人倫の原理』としての『神のロゴス』—」。

これらのうち著者の独創的解釈として最も光彩を放っているのは、ロゴスの二重性を論ずる第三章である。フィロンは *λόγος* の語を頻繁に用いている(名詞的概念をあらわす語としては、*θεός*, *φύσῃ* に次いで用例が多い。これに匹敵するのは *φύσις* くらいのものであろう)。しかしロゴス論をまとめた形で提示しているのは、*De Vita Mosis* II 109-130 が唯一の個所である。フィロンはそこで、七十人訳が *λογεῖον τῶν κρίσεων* と訳した祭司のさばきの胸当などをロゴスなどのシンボル (*σύμβολον*) として解釈している。*λογεῖον* とは、舞台のような話をする場所を意味するが、フィロンはこれをロゴスと関係させている。つまりロゴス(理性)の場所である。そしてこれが二重である(*διπλοῦν τὸ λογεῖον*)のに応じてロゴスも二重である(*ὁ λόγος διπλός*)、という。これはさらに次のような構造をもつと考えられている。

二重のロゴス	{	宇宙のロゴス	{	無体的、範型的アイデアに関するもの
				可視的なものに関するもの
		人間本性のロゴス	{	内に留まるもの
				表出されたもの

このような二重ロゴス論については古くからさまざまな解釈がなされてきたが、著

者はそれらを越えて新しい解釈を提出する。著者はいう、『人間のロゴス』の二重性が『ロゴス・エンディアテトス (理性)』と『ロゴス・プロフォリコス (言葉)』の象徴的相関関係を意味したように、『宇宙のロゴス』の二重性は神の世界創造の範型としての『神のロゴス (英知的世界)』とその模写として表出された『感覚的世界』の象徴的相関関係として成立するのである」(153ページ)。そして『『象徴的相関性』こそそれはむしろ『宇宙のロゴス』に本性的に内属する根本原理である」(157ページ)。著者の解釈は、評者の考えでは、ヘブライズムにおける「神の自己二重化」ということに根本的には基づくものと思われる。徹底した解釈を見出しえなかった古い研究者たちや、この個所に十分な注意を払わなかったウルフソン、またウルフソンを批判してこの個所を取上げながらやや単純な結論に赴いたボルマン (K. Bormann, *Die Ideen- und Logoslehre Philons von Alexandrien. Eine Auseinandersetzung mit H.A. Wolfson*, Dissertation Bonn 1955, Maschinenschrift, S.103f.) などに比して、著者の解釈は思想的に深く、また以下の諸章で詳しく展開されている広範な関連テキストの検討に支えられて、きわめて説得力に富むものになっている。60年以後のフィロンのロゴス論の研究史と照らし合わせてみても、一方では現在ほぼ定説となっている、彼のロゴス論のユダヤ智慧文学の背景は、すでに著者が強調していたところであり、また他方では、ストア思想や中期プラトン主義についての研究の進展も、彼のロゴス論の根本モチーフをそこから説明することに成功していない。フィロン以後のプラトン主義者にフィロンは知られておらず、言及するに足る影響を与えていない。彼の影響はもっぱら教父に限られる (cf. J. Dillon, *The Middle Platonists*, Ithaca 1977, p.144)。このような点から見ても、著者の研究成果は現代の研究によって確認されているとともに、なおそれらを凌駕するすぐれた解釈を含んでいるといえることができる。

著者のテキスト解釈を細部にわたって紹介することができないのは遺憾であるが、著者がアレクサンドリアのクレメンスについてフィロンの影響を追跡するいくつかの論文を発表し、本書にも二篇を収めていることは、特記してよい。クレメンスこそ、フィロンを読んだことが確実に知られる最初の教父であり、かつフィロンに匹敵する哲学的教養の水準に初めて達したキリスト教神学者として (cf. G. May, *Schöpfung aus dem Nichts*, Berlin/New York 1978, S.21), 後代のキリスト思想に大きな影響を及ぼした人物であるからである。著者のフィロン研究がクレメンスとそれ以後のキリスト教思想に延長されていることは、著者がキリスト教思想史の構造と展開にも卓

越した見識を有していることを示している。この点でも本書は、ウルフスンに比肩しうるような大きなパースペクティブを基礎にもつといてよい。

ただ評者に残る一つの *desideratum* は、象徴的相関関係という解釈学的な根本概念を提出した著者がフィロンの *σύμβολον* 概念と彼の解釈学とをさらに徹底的に検討して下さっていたら、ということである。そうすることによって、象徴的相関関係の概念が著者の概念であるのみならず、なによりもフィロン自身の概念であったことがあるいは明らかにされるかもしれないと期待するからである。

加藤 武 著『アウグスティヌスの言語論』

創文社，1991年，viii+381+9頁

岡部 由紀子

全体は三部からなり、過去30余年にわたって各誌に発表されてきた研究成果に加筆し表題のもとに編み直した論文集という体裁をとっている。この著作の魅力の一つは、表題に掲げられた主題に対する大別二つの「異なった」アプローチが示されていることにある。即ちこの著作をとりわけ特徴づける第一部「言語哲学的視点から一声と言葉」（以下「声論」と）、第二部「解釈学的視点から一経験と解釈」、第三部「『キリスト教の教え』の言語哲学—『キリスト教の教え』を読む」（以下「解釈論」と）である。この第三部は、著者による邦訳『キリスト教の教え (*De doctrina christiana*)』(以下『教え』；「アウグスティヌス著作集」6，教文館1988本邦初訳)の「解説」に相当している。

また一方、初出一覧によって、ここに採録された論文の成立を大別三つの時期に区分できる。即ち、(A) 第二部第一章「経験」(1編(86)を除いてすべて、65年以前)、(B) 第二部第二章「解釈」(85年以降『教え』の刊行まで)と第三部(『教え』は70年代の初めに着手され88年に刊行)、(C) 第一部(1編(80)を除く5編は全て、翻訳完成後)である。この場合、「声論」とは(C)を、「解釈論」とは(A)(B)を指すことになる。